

今からおよそ二千五百年前にお生まれになり、仏教を説かれたお釈迦さまは八十歳となり、二月十五日にその生涯の終わりの時をむかえます。

お釈迦さまの最期にあたり、お弟子さんたちの多くは、「世間はうつろだ。世の中はむなし。われらはこれから頼るべき師匠もなく、一家の柱として仰ぐ方もなくなって、身寄りのない哀れなものとなってしまふ」と絶望し、少しでも長くこの世界にとどまってほしいと願い、お釈迦さまのもとに集まります。

曹洞宗で、お通夜の儀式にお唱えすることの多い『遺教経』というお経には、お釈迦さまの最期の説法が著されています。

その教えは、「戒律を守ること」「時を大切にすること」「常に精進すること」など、それまでにお釈迦さまが説法の旅の中で語ってこられた教えの数々です。長い旅路の中で語られてきた教えを耳にするお弟子さんの中には、お釈迦さまから教えて頂いた時のことを思い出しながら、改めてその教えを自身の心に刻んだことでしょう。

この『遺教経』の終盤にお釈迦さまは、自分がいなくなった後に、お弟子さんの中には悲しみ悩みをその胸に抱き、それらに圧倒されるものがあるかもしれないと考え、先回りするかのように「悲しみや悩みを抱くことがないように」と諭されます。そしてお釈迦さまは、避けることのできない事実として、命には例外なく終わりがくることを伝えます。その一方で、これからも引き続き自らを律し、教えを護ってゆくようにと求めます。その使命を全うすることによって仏とその教えが世にありつづけるということ、私たちに教えてください。

お釈迦さまの教えが、私たちに道しるべを示してくださっているという一方通行なのではなく、それを受け継ぐ私たちの生きざまに教えが現れるかどうか……。いわばお釈迦さまは、お弟子さんたちにその教えの命運を託したとも考えられるでしょう。

お釈迦さまがお亡くなりになってから、およそ二千四百年以上を経た今年も、二月十五日には、お釈迦さまのご遺徳を偲び、「涅槃会」の法要が執り行われます。

この日を、仏様の教えを学び、今日を生きる私たちがその教えを護り、伝えることの大切さを共に確かめる機会といたしたいものです。